

カルナの出生譚——訳注(下)

前号において、カルナの出生譚の前半（『マハーバーラタ』

第三卷二八七—二九一）を訳出した。すなわち父王クンティ
ーボージャのところ⁽¹⁾に現れたバラモンに献身的に仕えたプリ
ターは、バラモンから特殊な呪文を授けられる。それは彼女
の望むいかなる神をも呼び出せるものだった。バラモンが去
った後、好奇心にかられたプリターが呪文を試してみると、
たちまちにして太陽神スーリアがやってきて、驚くプリター
のへそに触れる。直ちに彼女は妊娠し、後の英雄カルナを宿
すのである。

二九二

ヴァイシアンパーヤナは言った。

(1) その後、プリターの（宿した）胎児は大きくなってい
きました。大地の王よ、それはちょうど、空における十
日以降の明分月のターラーの夫（月）⁽²⁾の如くでございま

した。

(2) 腰つきの美しいその娘は、親族たちを恐れて、胎児（の
あること）を隠しつつ宿しておりました。そのため人々
は（妊娠しているとは）わからなかったの⁽³⁾でございませ
す。王よ、乳母を除いては誰も、女たちの部屋にひきこも
り、身を守ることに巧みなその娘のことに気づかなかつ
たのでございませす。

(4) やがて時が至って、美しきその乙女は彼の神（スーリ
ア神）の恩寵によって、不死の者の如き子を産み落しま
した。

(5) 彼は、甲冑を着し、金色に輝く耳輪をつけ、眼は黄色、
肩はがっしりとして、父（太陽神）の如くでありました。

(6) 乳母と相談した彼の輝ける乙女は、生まれたばかりの
(7) 赤児を、四方のよくおわれた箱に入れたのでございま
す。その箱といえは、気持ちよく滑らかでございました

小倉 泰

が、これを蜜蠟できっちりつぶさいで、アシュヴァ川に流したのでございます。

(8) 彼女は、嫁入り前の娘が子を持つのは為されるべきことではないと存じてはおりましたが、王中の王よ、息子に対する愛情ゆえに、乙女は哀れにも泣き悲しんだのでございます。

(9) クンティーは、その箱をアシュヴァ川に流しながら、次のように語りました。お聞きなさい。

(10) 「坊や、空の、大地の、天の、そして水に住む生き物からあなたが安全でありますように。

(11) 「あなたの行く道に幸ありますように。そしてまた道すがらあなたに近づく人が、坊や、悪意なき人でありますように。

(12) 「水の中では水神ヴァルナが、宙にあっては遍満する風が、あなたを守って下さるよう。

(13) 「あなたを、あらゆる光のうちの最勝者であるお父様が、いたるところで保護して下さいますように。実にお父様の神々しい命令によって、私はあなたを授かったのですから、坊や。

(14) 「アーディティヤ、ヴァスス、ルドラ、サーディヤ
(15) ~1、そしてすべての精霊たち、マルトとインドラ、そしてまたディシャスと守護神たち。不幸にかかわらず、

すべての神々が、あなたを守って下さるよう。

(16) 「私は、(あなたが)たとえ異国にあってても、甲冑によって明らかあなたの姿を見紛うことはありません。

(17) 「坊や、光に満ちた日輪の神、あなたのお父様はなんと幸せなんでしょう。お父様は、天眼によって、(アシュヴァ)川を流れて行くあなたを見るのですから。

(18) 「あなたを拾い上げる女はなんと幸せなんでしょう。どの渴いたあなたは、彼女の乳房に吸いつくでしょうから。神から生まれた坊やよ。

(19) ~ (18) 「日輪の輝きをもち、神々しい甲冑を身にまとい、神々しい耳輪で飾られ、眼といえは蓮のように広く大きく、手の平は蓮華のように赤銅色、額は美しく、髪も素晴らしいあなたを養子にする女は、いったいどんな夢を見ることでしょう。

(20) 「坊や、舌足らずに甘い言葉を言いながら地面をはいまわり、ほこりにまみれるあなたを見る人たちは何と幸せなんでしょう。

(21) 「それから、坊や、ヒマラーヤの森で生まれた、たてがみもつ獅子のように、若さの頂点にあるあなたを見る人々は(何と幸せなんでしょう)。」

(22) 王よ、このようにプリターは様々にカルナを哀傷して、
(23) わが子への悲しみから、蓮のような眼から涙を流しつつ、

そしてわが子に再会することを切望しつつ、真夜中に、その箱を乳母とともに、アシユヴァ川の水に流したのでございます。

(24) 彼女は箱を流してしまうと、父が目を覚ましはしないかと恐れて、悲しみに打ちひしがれながらも、再び宮殿にはいったのでございました。

(25) 一方その箱は、アシユヴァ川よりチャルマンヴァアティ一河へ進み、チャルマンヴァアティ一河からヤムナ川、そしてガンジス川へと進んだのでございます。

(26) そしてガンジス河において波に運ばれた箱の中の男の子は、スータ⁽⁴⁸⁾のすみかであるチャンパーの町に到着いたしました。その箱は、アムリタより作られた神々しい甲冑と、素晴らしい耳輪をつけた、神の子どもと、(彼の)定められた運命とを運んだ、というわけなのでございます。

二九三

ヴァイシアンパーヤナは言った。

(1) 一方まさにこの時、ドリタラーシュトラ⁽⁴⁹⁾の友人であるアディラタというスータが、妻とともにジャーフナヴィー(ガンジス)河へ行ったのでございます。

(2) ラーダーという名の彼の高貴な妻は、王よ、地上にお

いて美しさのゆえに並ぶ者がなかったのでございますが、子どもを得るために最上の努力をしたにもかかわらず、息子がなかったのです。

(3) その彼女が、たまたま運ばれてきた箱を、魔除けのひもをつけ、取っ手で飾られ、ジャーフナヴィー(ガンジス)河の波によって運ばれてきた箱を見つけたのでございます。

(4) すると輝けるその女は、好奇心から、到着したその箱を取らしめ、(そのことを)スータのアディラタに語ったのでございます。

(5) すると彼は、その箱を持ち上げ、水からとり出しましたが、道具によってこじ開けてみると、そこに小さな男の子を見出したのです。

(6) (その男の子の姿は)まるで上ったばかりの太陽の如く、金色の甲冑を身にまとい、みがかれた耳輪をつけた顔は光り輝いておりました。

(7) スータは妻ともども驚きで眼を丸くし、男の子をひざの上にのせ、妻に語ったのです。

(8) 「内気な⁽⁵⁰⁾、そして輝ける女よ。これは実に私が生まれ(9)て以来の驚異である。この男の子は、きっと私たちのもとにやってきた、神の子なのだと思う。確かにこの男の子は、子のない私に神が与えて下さったのだ。」とこのよ

うに申しまして、彼はその男の子をラーダーに与えたのでございます。大王よ。

(10) ラーダーは、神のような姿の(男の子を)、蓮華の如くに輝ける、吉祥によって包まれた、神の子である息子を正式に受けとったのでございます。

(11) そして彼女は、彼を、それにふさわしく育てました。彼は成長し、力あふれるようになったのでございます。そしてそれからというものは、彼女は、自分自身の息子たちも産んだのでございました。

(12) 再生族(バラモン)たちは、金色の甲冑をつけ、金の耳輪をしたその男の子を見て、ヴァスセーナと名付けました。このようにして、限りなき勇気をもち、力ある彼はスータの息子となり、ヴァスセーナ、あるいはヴリシヤと(いう名で)知られたのでございます。

(14) スータの長男である彼は、体もたくましく成長いたしました。そしてプリーターの方も、スパイによって、神々しい甲冑をつけた彼(の居所)を見つけたのでございます。

(15) スータのアディラタは、成長した彼を見て、頃合いを見てハステイナープラの町に派遣いたしました。

(16) その地で、力ある彼は、弓を学ぶためにドローナに近づき、またドゥリヨーダナとも友人となりました。そし

てドローナとクリパとラーマから四種の飛び道具を得て、世にも卓越した弓使いであるとして知られるようになったのでございます。

(18) (このようにして)彼は、ドゥリタラーシュトラの息子たちと結び、パールタ(パインドウの五王子)たちに敵対し、常に、偉大な心もてるパルグナ(アルジュナ王子)と戦うことを望んだのでございます。

(19) 初めて(お互いに)会って以来、常にカルナはアルジュナと競い、アルジュナはカルナと競いました。人民の王よ。

(20) ユディシュトラは、耳輪をつけ、甲冑に包まれた(カルナ)を見て、戦闘においては彼は不死身であると考えて、非常な苦しみを感じたのでございます。

(21) 一方、カルナは、王中の王よ、正午になると、水の中に合掌して立ち、太陽を称えたものでございました。ちょうどその場に布施を求めるバラモンが来れば、彼は、いかなるものも拒絶はしなかったものでございます。

(23) その彼のところに、(ある時)インドラ神がバラモンに(変装して)、「布施を与えよ」と言って近づいて来ました。するとラーダーヤ(ラーダーの息子)は、「喜んで」と答えたのでございます。

ヴァイシアンパーヤナは言った。

(1) ヴリシャ(カルナ)は、バラモンを装ってやって来た神々の王を見て、「ようこそ」とあいさつしたのですが、彼の意図はわかりませんでした。

(2) 「何を差し上げましょうか？金ののどを持つ娘59があるいはまた、牛舎に満ち満ちた村々を？」と、アディラタの息子(カルナ)はその賢者(バラモン⁵⁹インドラ)に申しました。

(3) するとバラモンは申しました。「金ののどを持つ娘も、(その他の)喜びを増す(贈り物)も、私は今欲しくない。そんなものは、それを欲しがる人々に与えたらよからう。(私の欲しいのは)汝の生得の甲冑と耳輪である。

間然するところのなき者よ。それ(甲冑)を(体から)切り取って私に与えよ。もし汝が真実の誓いを為す者ならば、私は、汝がそれをすぐに渡すことを望んでいる。敵を焼き尽す者よ。私の欲しているもの(甲冑)は、すべてのうちで最上の贈り物なのだ。」

(6) カルナは申しました。「賢者よ。私はあなたに、土地、娘たち、牛たち、幾年分もの米を差し上げましょう。し

かし甲冑と耳輪は差し上げられません。」
ヴァイシアンパーヤナは言った。

(7) その再生族(インドラ)は、カルナによって、多くの言葉をもって様々に請われたのでございますが、バラタ族の最上なる者(ジャヤメージャヤ)よ、他の贈り物は求めなかつたのでございます。

(8) 彼(カルナ)は、できる限り(バラモンを)慰撫し、また儀則にのっとって崇拜したのでございますが、それでもその最上のバラモン(インドラ)は、他の贈り物を望まなかつたのでございます。

(9) 再生族の最勝者たる彼が他の贈り物を選ばないでいると、ラーダーヤ(カルナ)は、今度は笑いながら申しました。

(10) 「賢者よ。私の生得の甲冑と耳輪はアムリタから作られたもので、これがあるために、私はこの世において傷つくということがないのです。ですから私は差し上げるわけにはまいりません。安泰で、(他に)匹敵するものはない(私の)広大な地上の王国を、あなたは享受して下さい。バラモンの中の牡牛59よ。私がもし耳輪と生得の甲冑を奪われれば、再生族中の最勝者よ、私は、敵の近づくところとなりましょう。」

ヴァイシアンパーヤナは言った。

(13) パーカの懲戒者である神(インドラ)が、(それでも)、他の贈り物を選ばずにおりますと、カルナは再び笑って、

次のような言葉を申しました。

- (14) 「神々の中の神よ、私はあなた様が（誰なのか）もうわかっていきます。シャクラ（インドラ）よ、私によってあなた様に、誤った仕方でも贈り物が差し上げられるのなら、それは正しいことではありません。あなた様は神々の主なのであり、また他の生類たちの主でもあるのですから、贈り物が私にも与えられるべきであります。生類たちの創造者よ。

- (16) 「神よ、もし私が耳輪と甲冑を差し上げてしまえば、私は傷を受けてしまうことになりましょう。そしてあなた様も、シャクラよ、笑われてしまうではありません。ですから、（何か）交換の物を下さってから、私の無上の甲冑と耳輪をお取り下さい。シャクラよ。さもなければ私は（これらを）差し上げられません」。

- (18) シャクラは申しました。「私が汝のもとにやって来るということとは、すでに太陽（スーリア神）がお前に話したのだな。⁽¹⁹⁾それは間違いないようだ。よろしい。カルナよ。汝の望むようにしろ。私の金剛杵を除いて、汝の望むものを選ぶのだ」。

ヴァイシアンパーヤナは言った。

- (20) するとカルナは喜びに心満たされて、ヴァーサヴァ（インドラ）のところに行き、決して的外さぬ槍に手を伸

ばして、これを選んだのでございます。

- (21) カルナは申しました。「甲冑と両の耳輪と（交換）で、私にこの槍をお与え下さい。ヴァーサヴァよ。戦場において敵どもを打ち倒す、この決して的外さぬ槍を」。

- (22) するとヴァーサヴァは、心の中でほんの一瞬思いをめぐらせて後、その槍に関してカルナに次のように語ったのでございます。大地の王よ。

- (23) 「カルナよ。私に（汝の）耳輪と生得の甲冑を与えよ。
(25) そして汝は、条件に従って私の槍を取れ。この的外さぬ（槍）は、（私の手から）放たれると、百人ずつ敵を殺して戻ってくるのだ。そして（後には）ダイティアどもが死んでいるのだ。汝の手にされれば、これは、ひとりの、強く、とどろき、輝ける者（アルジュナ王子）を殺すだろう。だがその後は再び私の手に戻ってくるのだ。」

- (26) カルナは申しました。「私は、大戦争において、たつたひとりの敵（アルジュナ王子）を殺したいのです。彼は、とどろき、輝き、私は彼を恐れているのです」。

- (27) インドラは申しました。「汝は、戦において、ひとりの、とどろける、強力な敵を殺すだろう。汝はこのひとりのみを求めているが、しかし彼は、卓越した者によって守られているのだ。ヴェーダに通暁した者たち（バラモン）が、ヴァラーハ、無敵のハリ、想像もできぬナー

ラーヤナと呼ぶ彼、すなわちクリシナによって彼（アルジュナ王子）は守られているのだ」。

(29) 「神よ。たったひとりの勇者を殺すために、その最上の的違わぬ槍を私にお与え下さい。私が輝ける（その勇者）アルジュナ王子を殺せるように。私は、耳輪と甲冑を切り取ってあなた様に差し上げましょう。ただ肉体をはがれた時に、私が忌むしい姿とはなりませぬように」。

(30) インドラは申しました。「いかなる場合にも、汝が忌むしい姿となることはないであろう。肉体は傷つかぬであろう。汝は、いつわりは望まないゆえに。雄弁なるカルナよ、汝は再び、汝の父の如き容色と輝きに戻るであろう。（ただ）もし、他の武器を（手にしている時に）、不注意にも的違わぬ槍を放つならば、きつとそれは汝（自身）に落ちてくるであろう」。

(31) カルナは申しました。「あなた様がおっしゃるように、最大の危険にあるとき（にのみ）、私はこのインドラのものである（槍）を放ちます。シャクラよ。私はあなた様に誓います」。

(32) ヴァイシャンパーヤナは言った。

(33) すると彼は輝く槍を受け取った後、人民の王よ、鋭い剣をつかんで、体中を切りさいたのでございます。

(34) すると、神々、人間ども、そしてダーナヴァども、また

たあらゆるシッダの群れも、このようにカルナが自らを切りさいているのを見て、どよめいたのでございます。なんとなれば、彼には、傷の痛みはなかったからでございます。

(35) そしてカルナ、人間の英雄、が絶えずほほえみつつ、剣によって体を切りさいていくのを見て、天界の太鼓の音が鳴り響き、神々しい花の雨が上から降って来たのでございました。

(36) 見事な甲冑を体から切り取ってしまつと、（カルナはまだ濡れたままのそれを、ヴァーサヴァ（インドラ神）に差し出したのでございます。また同じように耳輪を切り取って、それも差し出し、こうした偉業によって、彼はヴァイカルタナとして知れ渡つたのでございます。

(37) 一方シャクラは、してやったりと大笑い。カルナを世において有名ならしめてやったのでございます。なんとなれば、彼は、パーンダヴァ（パーンドウの五王子）を救ってやったと考へたからでございます。そして彼は、自らの天界に戻っていったのでございました。

(38) ダールタラーミトラ（ドゥリタラーシュトラの百人の息子たち）は、カルナが（甲冑と耳輪を）盗まれたのを聞いて、誇りも打ち砕かれ、皆は悲嘆に暮れたのでございますが、一方、森にいたバルター（パーンドウの五

王子)たちは、スータの息子(カルナ)の導かれた境遇を聞いて、大喜びであったのでございました。

三

ここに訳出した「カルナ出生譚」について一言を付する前に、便宜的に次の四つの要素の抽出が可能であろう。すなわち、(一)神(太陽神スーリア)による人間の女(ブリターークンティ)の処女懐胎と、英雄(カルナ)の誕生、(二)箱舟による捨子、さらにその後のいきさつを含めれば(三)英雄の活躍および(四)英雄の悲劇的最後である。

これを全体として英雄出生説話としてとらえれば、英雄の出自の少なくとも一方を人間ではなく、神に結びつけるものは、ゼウスがダナエに産ませたペルセウス、マルス神が巫女に産ませたロムルスとレムスの双生児、雷神の足跡に感応した華胥氏より生まれた伏羲などを思い起すまでもなく、東西にその類例が多い。本邦の三輪山型の伝説、賀茂一族の起源説話などもこの部類にはいるであろう。すなわち、(一)と(三)の要素でいえば、これは非常に広範囲に類型の分布を見る、処女受胎による英雄の出生譚と考えられるのである。

次に(二)の要素であるが、これを箱舟漂流型とみれば、これも類例にはことかかない。先のペルセウス伝説では、生まれたペルセウスは、娘の子に殺されると予言されたアクシオン

スによって母子ともども箱に入れられて海に流され、セリフオス島に漂着している。子どものみが流されるという点に限っても、中国の竹王は流れてきた竹から生まれているし、また旧約のモーゼは箱に入れられてナイル河の葦の間に置かれていた。さらにアッカド朝のサルゴン王も箱に入れて河に流されたという⁽⁶⁸⁾。

話を本邦に転ずれば、かつて柳田国男は全国に分布する「うつぼ舟」の説話、すなわち空洞の舟に乗せられて海岸に漂着した母と赤児の説話群について論じ、流れ来った桃から生まれた桃太郎や瓜子姫の話をも含めて、それらの背景に古代の母子神信仰の名残りを想定している。また三品彰英も、八幡信仰を論ずる過程で、「うつぼ舟」説話に属する「大隅八幡縁起」と朝鮮半島における類似の説話の関係について言及している⁽⁶⁹⁾。

さらにそれらの研究を背景として、石田英一郎は、南太平洋に類例の多い八丈島のタナバ伝説、さらにはインディオの間の伝説にまで目を向けて、このような説話の類型が特に、東南アジアから東アジアにかけて濃厚に分布していることを指摘したうえで、それらの根源を古ユーラシアの母神崇拜に求めるまことに希有壮大な仮説を提示している。

ここで「カルナ出生譚」に立ち戻ってみると、最初に指摘した(一)〜(三)の要素を考えた時、この説話の中に、柳田国男や石

田英一郎の説いた母子神信仰なるものの姿を想定することもあながち不可能ではないかも知れない。そもそも、カルナの母クンティーは、人間の女とはいっても、その子どもたちをいずれも神々との間にもうけている。古来インドには女神崇拜が盛んであり、子を抱く母神像が多数出土していることを考えても、『マハーバータ』の英雄たちを産み出したクンティーに母神崇拜の形跡を想像することは、方向としては全く退けてしまうことも出来ないだろう。

だがそれでは、東南アジアから東アジアにかけて特に濃厚に分布するとされた、箱舟漂流型説話、就中、本邦における「大隅八幡縁起」をはじめとする「うつぼ舟」説話と、この「カルナ出生譚」との関係はどうであろうか。

八幡神は、「大隅八幡縁起」によれば、陳大王の娘大比留女が七歳の時に太陽に胸をおおわれた夢を見て産んだ子であり、これを恥じた大王によって母子ともども「うつぼ舟」に乗せられて大隅の岸に漂着した神だとされているが、この神が後には武勇の神として祀られていったということと考え合わせると、「カルナ出生譚」とのある程度の類型的一致とは興味深いものがある。

しかし前述の(四)で明らかのように、カルナは悲劇の英雄である。またこの説話のひとつの特色となっている耳輪と甲冑は、八幡の縁起にも、はたまた他の説話にも登場しない。厳密に文献学的立場をとれば、両者の直接の影響関係を論じる

ことはできないであろう。

ここでは、この「カルナ出生譚」を原典に即して訳出、紹介し、これを母子神信仰に関連する説話として類型的に考えた場合、多々興味深い要素を含む可能性のあることを指摘して筆を置く。

(注) * (1) (44)は前号掲載分の注記である。

(1) 例えは、Preston, J. J., ed, *Mother Worship* (North Carolina, 1982); Przyjalski, J., "Le culte de la grande déesse," *Revue de l'histoire des Religions* CVIII-1 (Paris 1938) M・エリナーズ、堀一郎訳『大地・農耕・女性』(未來社、一九六八)。中国に関しては、池田末利「古代中国の地母神に関する一考察」『宗教研究』二六八号、一九六一。など。

(2) Winternitz, M., *A History of Indian Literature*, vol (Delhi, second ed, 1972) P. 358 には筋が説明されているが、Hopkins, E. W., *Epic Mythology* (New York, reprint 1969) P. 87; Pandey, L. P., *Sun-Worship in Ancient India* (Delhi, 1971) P. 61; Meyer, J. J., *Sexual Life in Ancient India*, (London, 1930) p. p. 36-37 等に部分的に言及されているのみである。この挿話に注目されたのが、原実「ラーマ物語と桃太郎童話」『足利惇氏喜寿記念オリエント学・インド学論集』(国書刊行会、一九七八)五二九頁以下である。

(3) カルナはアルジュナとの一騎打ちの最中、戦車の車輪を地中にはめてしまう。カルナはその車輪を引き出そうとしながら、

アルジュナに戦争法規にのっとって、戦闘を中止するよう要請する。それを無視するようにと説得するクリシュナの言葉を受け入れて、アルジュナは法にそむいて、戦車をたて直そうとしているカルナを殺す。

(4) 『マハーバータ』は聖仙ヴィヤーサの作と伝えられ、その弟子ヴァイシアンパーヤナが語り手となって、ハステイナープラの王でありかつアルジュナの孫であるジャナメージャヤ王の蛇祀の休止期間に郎誦される、という体裁をとっている。

(5) 原文は「苦行をやわらげるための飾り」と訳せるが、いかなるものであるかは不明。

(6) インド神話においてはヴァスイシタ仙 (Vasistha) と並んで重要な役割を果たす聖仙アガステイヤ (Agastya) に殺された羅刹。兄のイルヴァラとともにバラモンに敵対するヴァーターピーは、バラモンたちを次のような方法で殺していた。すなわちヴァーターピーが山羊に姿を変え、それをイルヴァアラが調理してバラモンに供養する。バラモンが食べ終わると、兄が弟の名を呼ぶ。するとバラモンの腹を突き破って、中からヴァーターピーが飛び出して来る。しかしアガステイヤ仙はそのままヴァーターピーを胃の中で消化して殺してしまった。「梵天の笏」云々は出典不明である。

(7) いかなるエピソードであるかは不明。

(8) (11) プリターはヤドゥ、一族の王、シュラセーナの娘として生まれた。シュラセーナの妹の息子であるクンティボージャには子どもがなかったために、プリターは養子に出され、クンティ (クンティの娘) と名のることになった。兄弟にあ

たるヴァースデーヴァは、アルジュナ王子の御者をつとめるクリシナ神の父である。

(12) 原文「あなたが」。以下「父」と訳す。

(13) 苦行を積んだバラモンの呪いの力は強大であり、在俗の人間や羅刹の命をも左右できると考えられていた。

(14) 高名な聖仙であるチャヴァアナが森で苦行をしていると、シャリヤーティ王の娘のスカニヤーが誤って聖仙の眼を刺してつぶしてしまふ。以後王国には病気がはびこり、王は、チャヴァアナのもとに向いて許しを乞うた。

(15) 原文は「子どもである娘」。

(16) ハンサ鳥は、サギ、あるいは白鳥のような鳥で、純白であることの比喩に用いられる。

(17) 家庭祭火をともしておく場所は家の中で最も神聖な場所である。

(18) いついかなる時でも、バラモンは供養されなければならない、とされる。

(19) ジャナメージャヤ王はアルジュナ王子の孫。彼への呼びかけ。(20) ヴェーダに関する知識を扱ったウパニシャッドの書名。「聞かれる」というのは吟誦を前提としている。

(21) 原文「それほど長くない間に私は知るだろう」。

(22) 原文 *rajasyala* は、「生理中の女」という意味で「初潮」という限定はないが、文脈からこのように訳した。

(23) 太陽神スーリアのこと、スーリアは実際の造形作品においても、こうした姿で描かれることが多い。 c.f. Pandey, L. P.,

op. cit. 特に図版。

- (24) スーリア神のこと。
- (25) 以下、「スーリア神」と「太陽」と文脈に応じて訳す。
- (26) 古代インドでは、「象のように歩む」という比喩は、女性の優雅な歩みをたとえるのに使われる。
- (27) 原文 *ślavīṭta* は「よき行動」としか訳せない。あるいは皮肉か。
- (28) スーリア神のこと。
- (29) 身分の高い女性に *devī* 「女神」という言葉をあてはめることは多い。
- (30) 原文 *prabhavanti* は「権力がある、力を持っている」というような意味。
- (31) 直訳すれば、「純潔は、女性の正しいふるまいを尊重する」。
- (32) 前者は、呪文を戯れに用いたこと。後者は、肉体をスーリア神に委ねること。
- (33) 原文 *na capi yukam gantum hi maya mihyākṛtana vai* .
- (34) 原文 *vaktavyah* 「語られるべき者」
- (35) *tjas* は「威光」*śapas* は「苦行、熱力」と通常訳されるがこの文脈ではうまくあてはまらないので、そのままにしておいた。cf. 原実『古典インドの苦行』(春秋社、一九七九)
- (36) 「タパス」を「神秘力」のようなものと解すれば、「ゆっくりと考えなければ」というような意味であろうか。この詩節は筆者には理解できない。
- (37) 原文 *dharma* も多義的な語であるが、一応「人倫」と訳しておいた。

- (38) あるいは「見るも恐しき者」。原文 *turdarga* 。
- (39) 「親族たちが、スーリア神の意志に反して、クンティーを嫁に出す」という意味か。
- (40) この箇所のかげ言葉はこれ以上訳出できなかった。
- (41) 原文 *vikāra* は、「変形」ないし「一変した異常な状態」というような意味。
- (42) 父親である太陽神スーリアと同じ姿形で、ということ。
- (43) 神々の飲用する不死の飲料。漢訳では「甘露」。
- (44) 「へそに触れる」ことによって妊娠していることに注意。クンティーはこのように太陽神スーリアによって第一子カルナを産むが、後パンドゥと結婚して得たユディシュトラ、ビーマ、アルジュナの三王子もそれぞれ、正義の神ダルマ、風神ヴァーユ、インドラ神との間に得られた子どもである。
- (45) 新月から満月までの二週間を明分月 *śukla pakṣa* という。プリハスバティー神の美しい妻ターラーはチャンドラ(月)と恋におち、夫を捨てて同棲した。二人の間の子どもがブッダだともいわれる。ここでの意味は「満月に近い月の如く」ということ。
- (46) それぞれ神名。
- (47) 原文「汝を息子として考える」
- (48) スータは、「御者」という意味。後出するアディラタのこと。
- (49) パインドゥの五王子のおじ。彼らに敵対している。
- (50) 原文 *bhīra* はこのように訳すしかない。このように、梵語の呼格は訳出しても意味不明になることが多い。
- (51) 二人の息子としてお互いが正式に認知した、ということ。

- (52) 『マハーバーラタ』の主要な舞台となる都の名。
- (53) パンダヴァの五王子に弓を教えた、高名な弓の師範の名。
- (54) ドリタラーシュトラの長男の名。
- (55) 通常、弓、槍が含まれるにしても、四種が具体的に何を示すかは特定できない。
- (56) クンティの長男(実際はカルナの次に産まれた子)で、クル族との戦闘におけるパンダヴァ族の総指揮者。
- (57) 原文 *hiranyakantihita*。「声が美しい」という意味か。
- (58) 原文 *pungava* は、「最も優れた者」という意味にもなる。
- (59) 「敵に殺される」というような意味。
- (60) 父たるスーリア神がカルナの前にあらわれて、インドラがやってくる耳輪と甲冑を求め、絶対に渡さないこと、もしどうしても渡す時は、交換にインドラの的外さぬ槍をもらえ、と告げたことを示す。
- (61) 羅刹の一種。
- (62) クリシナ神は、アルジュナ王子の友人として彼の御者をつとめ、戦闘において適切な助言を与えて、大戦争においてパインドゥの五王子側を勝利に導いた。
- (63) この注意にもかかわらず、カルナは全く不用意に、アルジュナ王子ではない敵にこの槍を使ってしまい、その結果アルジュナの手にかかって殺される。
- (64) しばしばダイティアやアシュラと同視される羅刹の類。
- (65) 一種の神人族。神通力を有するとされる。
- (66) カルナの耳輪と甲冑を奪うことによって敵將カルナが不死身ではなくなったから。

以上の(注)の作製にあたっては以下の書物を自由に参照したが、煩雑を避けていちいち出所を記さなかった。

- 『梵和大辞典』鈴木学術財団(講談社 一九七八)・Williams, M., *A Sanskrit-English Dictionary* (Oxford, 1899, reprint 1982) ; Apte, V. S., *The Practical Sanskrit-English Dictionary* (Poona, 1957) ; Mani, V., *Purānic Encyclopaedia* (Delhi, 1975) ; Winternitz, M., *A History of Indian Literature*, vol. (Delhi, second ed, 1972), ルイ・ルヌー、ジャック・フィリオザ『インド学大事典』全三巻 山本智教訳(金花舎 一九七九—八二)。
- なお翻訳に使用したテキストは、
Sukharkar, V. S., ed, *The Mahābhārata* (Poona, 1942)
また、翻訳にあたって
The Mahābhārata, translated and edited by J. A. B. van Buitenen, (Chicago, 1973)
を参考にした。
- (67) 例えば、李昉等編『太平広記』第二百九十一、神一。
- (68) 森茂男「キュロス出生譚」『オリエント』18(一九七六年)、七一—七二頁。
- (69) 柳田国男「妹の話」・「桃太郎の誕生」・「うづぼ舟の話」など。
- (70) 三品彰英『神話と文化史』(平凡社 一九七二)。例えば脱解伝説などが紹介されている。
- (71) 前註(44)を参照。